

県中教研 保健部会だより

第 36 号

発行日 令和3年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 山岸久美子
題 字 金山 泰仁 先生

保健教育を効果的に進めるために

指導主事 森谷 信久

本年度の中学校教育課程研究大会では、砺波地区中教研保健部会から、生徒の健康課題を焦点化した体系的な指導計画を基にした「学校、家庭、地域が連携・協働した取組」や「生徒が主体的に考え、行動する指導内容・方法の工夫」等についての報告がありました。印象に残ったことを紹介します。

1つ目は、養護教諭と学年主任や担任が、共通理解を図ることの重要性を感じた「健康づくりノート」を通じた実践です。生徒の健康に関する課題を把握し、保健教育や各教科、委員会活動、地域・家庭等との関連性を図式化したカリキュラム・マネジメントシートを作成し、全校で活用されていました。また、活動のねらいや記入上の留意点について合意を図ることで、生徒は、実生活を振り返りながら自身の問題点や改善点を具体的に見出し、心身の健康づくりを目指していました。

2つ目は、生徒の主体性を引き出すための多様な活動が準備されていた実践です。生徒会保健委員会が決めたテーマ「生活リズムの大切さ」などについて、給食時の校内放送を活用した啓発活動、保健委員と養護教諭が連携し、一人一人の生徒に適した指導を試みる活動、養護教諭と担任による学級活動「今日の一日は未来につながる」など、生徒一人一人が、健康課題を自分事として捉えることができる活動となるよう配慮されていました。

保健教育を効果的に進めるには、養護教諭を中心としたマネジメントやコーディネートが、重要であることは言うまでもありません。しかし、それだけではなく、生徒が主体性を発揮する場をいかに提供していくかも重要な鍵になると考えます。今回の実践のように、生徒が健康に関心を持ち、生涯を通じて健康な生活を送る基礎を培うことができるよう、保健教育の一層の推進が図られることを心から祈念いたします。

(西部教育事務所)

「With コロナ」時代の健康教育

部長 山岸久美子

令和元年12月に中国で発生した新型コロナウイルス感染症。当初は、遠く外国での出来事と他人事のように思っていたのですが、瞬く間に世界中に感染が拡大し、日本でも感染者が増えていきました。一斉休校、緊急事態宣言、学校再開、新しい生活様式と状況は変化し、学校での感染予防対策が求められました。今年度は、例年以上に慌ただしさを感じる1年間でしたが、そのような中でも、関係各位のご協力のもと、研究大会を無事に終了することができましたことに、感謝申し上げます。

今年度の研究大会では、メディアコントロールに関する実践から、カリキュラム・マネジメントシートを活用し、R-PDCAサイクルを意識して取り組んだことで、学校全体による健康教育が推進された成果が発表されました。カリキュラム・マネジメントの視点を生かした指導の効果を具体的に考えることができ、とても有意義でした。

学校全体による健康教育の効果について考えたとき、新型コロナウイルス感染症予防が思い浮かびました。生徒たちは、新型コロナウイルス感染症について学び、予防意識を高め、マスクの着用、手洗い、換気、ソーシャルディスタンス等の予防対策を実践しています。学校全体で共通理解を図り、家庭や地域とも連携して対策を実施したことで、生徒が新型コロナウイルス感染症予防を自分事と捉え、実践につながっていると思います。

新型コロナウイルス感染症は、まだ終息する兆しはありません。終息後も、また違う感染症が流行するかもしれません。今回の経験を生かし、生涯にわたって、健康と安全を意識した行動を選択して実践することができる力を育ていけるように、保健部会での学びを深め、健康教育を推進していきたいと思います。

(滑・早月中)

第64回 研究大会報告

10月14日（水）滑川市立早月中学校において研究大会が開催され、全地区から77名が参加した。

研究主題「生涯にわたって主体的に心身の健康づくりに取り組み、健康で安全な生活を営む能力や実践的な態度を育てる健康教育はどのようにすればよいか」のもと、砺波地区の石崎妙子養護教諭（庄川中）、田村数枝養護教諭（城端中）から、メディアコントロールに関する取組を中心とした実践発表があった。

○発表内容と部会協議

砺波地区では、組織を生かした指導やマネジメント方法について継続的に研究を重ねてきた。本研究ではそれらを踏まえつつ、「健康課題の焦点化」「カリキュラム・マネジメントシートによる体系的な指導の展開」「R-PDCAサイクルによる指導や取組の改善」「様々な指導方法の工夫」等から主題の解明に迫っている。



健康づくりノートや教職員への調査等から生徒の課題を焦点化し、カリキュラム・マネ

ジメントシートを作成・活用した体系的な取組は、学校組織全体で健康教育を推進する上で有効だった。また、生徒会保健委員会の取組においてR-PDCAサイクルを意識した指導・支援を行うことは、生徒に主体性をもたせ、意識の高まりにつながった。養護教諭の専門性を生かした資料や指導の工夫は、組織としての活動を活性化させると同時に、生徒の健康課題解決への実践意欲を高めることとなった。

提案発表後の部会協議では、各自が事前に記入した協議シートを基に9人グループで話し合い、その後全体で協議内容を共有した。

視点1「効果的に健康教育を推進するための工

夫」では、「カリキュラム・マネジメントシート」の活用を中心に、マネジメントの在り方について意見が交わされた。

視点2「生徒の実践意欲を高める指導の工夫」

では、アクションプランを生徒が決める実践例や、自分の将来像から現在の在り方を考えさせ



る指導例について多くの意見が出され、参加者の関心の高さがうかがわれた。

○指導講話

森谷信久指導主事（西部教育事務所）からは、砺波地区の実践について、健康教育を体系的に捉え、学校組織全体で健康課題の解決に向けて連携・協働していた点について評価していただいた。発表を振り返り、「取組は全てカリキュラム・マネジメントシートに基づきR-PDCAサイクルを意識して行われており、関係者がチームとなって力を発揮していた。また、生徒会活動等で生徒の主体性を発揮できる場を計画的に取り入れることで、実践意欲を高めていた。資料提示や指導方法には随所に養護教諭の専門性が生かされており、効果的な健康教育を推進するための工夫、生徒の実践意欲を高める指導の工夫について、大変参考になる実践発表であった。」とのお話をいただいた。そして今後の健康教育について、「養護教諭一人で抱え込むのではなく、組織で取り組み、チーム力を発揮して行ってほしい。」との指導助言をいただいた。

カリキュラム・マネジメントの視点を生かした指導についてより深く考えることができ、今後の実践につながる有意義な大会となった。

谷口真由美（魚・西部中）

部会協議内容

部会協議では8つのグループに分かれ視点1、視点2に沿って協議を行いました。
熱心に意見が交わされました。その一部を紹介します。

視点1 効果的に健康教育を推進するための工夫について

<1グループ>

- ・全教職員に調査することで、生徒の実態を広い視野から見ることができ、課題が焦点化されていた。
- ・マネジメントすることで校内組織の活動が活発化し、特に学校保健委員会で学校医やPTAも巻き込んだ取組が素晴らしい。
- ・カリキュラム・マネジメントシートによって、計画的、組織的に取り組まれており、一つの目標に向かって実践化されている。



<2グループ>

- ・教師や生徒に対して説得力のある、多くの分かりやすい資料が整っている。
- ・調査結果をまとめ、説得力のある資料を学校保健委員会で提示することで、学校医やPTAとの連携につながり、広報誌の作成や全家庭への周知等、組織が生かされている。

<3グループ>

- ・健康づくりノートの記入方法が丁寧に示され、学級指導やアンケートにつながっている。
- ・カリキュラム・マネジメントシートの作成に当たり、1年間の振り返りの時期と合わせて調査したことで、次年度の計画につながった。

<4グループ>

- ・健康づくりノートのねらい等を教職員で共通理解を図るための資料が参考になった。
- ・来室カードについて、回覧の欄があり、生徒の様子が他教職員に分かるのでよい。しかし、保健室休養の生徒を調子が悪いのもう一度教室に行かせるのは、大変ではないかという意見もあった。

視点2 生徒の実践意欲を高める指導の工夫について

<5グループ>

- ・個別指導の時間の活用や、内容の焦点化が素晴らしい。保健室来室記録の細かい箇所を活用したい。
- ・学級活動で、ライフプランを導入に取り入れていることがとてもよい。他では、薬物や性の指導で将来を考える展開を取り入れた例もある。
- ・各資料が細かく丁寧で、とても参考になる。
- ・学校全体を巻き込むことが課題だが、生活ノートに組み込むなどの工夫ができるのではないか。

<6グループ>

- ・生徒が主体となったアクションプランや、生徒会保健委員会のアンケートが素晴らしい。
- ・寝る前30分ノーメディアは生徒が小学校の時の講演内容から考えており、小学校での知識が生かされている。
- ・個別指導は実施に難しい面もあるが、チェックシートを活用し、数値を見ることで生徒自身が自分の課題に気付くことができた。



<7グループ>

- ・アクションプランを生徒が作成するために、先生方の事前準備や、取組の工夫が素晴らしい。
- ・個別指導では、すぐに指導できる準備があることや休み時間に実施できること等、学校の体制が素晴らしい。

<8グループ>

- ・健康調査シートや放送原稿等、生徒の主體的な活動の工夫や、細やかな仕掛けが多くあった。
- ・養護教諭が情報や資料を与えることで、生徒の考えや意見を引き出し、意識、意欲を高めることができる。

夏野由美子（射・小杉南中）

心の健康に関する取組

富山市では、養護教諭が日頃感じている生徒の健康課題についてアンケートをとり、「メディア」と「心の健康」に焦点を当て、今年度から3年計画で研究を始めました。

ここでは、心の健康に関する実践を紹介します。

<心の健康に関する情報の発信>

新型コロナウイルス感染症の流行により、学校が休校となりました。感染症に対する不安や恐れ、孤独を抱えている生徒が多いのではないかと考え、学校のホームページや保健便りを活用して、心の健康に関する情報の発信を行いました。

<自身の心身の健康状態を把握させる取組>

学校再開後は、生徒自身が自分の心の健康状態を把握できるよう、保健室の来室者に食事内容や睡眠の状態、体重の増減等について聞き取りや助言を行いました。また、健康づくりノートを実施し、昨年度の結果と比べて問題のみられた生徒について、職員間で共通理解を図りました。その他、成長曲線・肥満度曲線のお知らせを全生徒に配布し、急激な体重の増減がないかなどに注目して自身の健康について考える機会としました。

<SOSの出し方を身に付ける指導の実施>

不安や悩みがあるときは、それを一人で抱え込まず、家族や友人、学校の先生等にSOS（助け）を求められるようにするため、「困っているときに助けてと言える人になろう」というテーマで養護教諭が保健指導を行いました。



その後の教育相談では、自身の悩みを担任に話す生徒がいつもより多かったです。

<今後に向けて>

今後は、生徒が自分の心の不調に気付いたとき、改善に必要な方法を身に付けられるような実践に取り組みたいです。

小林 美里（富・山田中）

小中連携して取り組むアウトメディア

本校は、全国平均に比べ、裸眼視力1.0未満の生徒の割合が高く、メディアの使用時間が生活習慣や学習成績に影響を及ぼしていることが問題となっています。そこで、生徒がメディアの適切な利用について考え、時間を有効に使うことができるようになることをねらいとして、小中が連携し、メディア利用の改善に取り組みました。

中学校区に1つの小学校のみのため、小中が連携することで家庭全体のメディアに対する意識を高めたいと考えました。取組を始めた平成21年度から3年間は連携していましたが、平成24年度からは全く連携していない期間や一部の取組だけを連携して行う期間がありました。しかし、保護者や教職員から、メディアについては学校だけでなく、家庭全体で取り組む必要があるため、小中連携が効果的であるという意見が多く出ました。そのことから、平成30年度に「アウトメディアチャレンジ週間」として、小中連携を再開しました。年5回の実施時期や内容、カードの様式を小中で統一しています。1回の取組期間は1週間で、目当て（レベル）を設定し、結果をカードに記入します。メディアをコントロールして時間を有意義に使うことや自分の生活習慣にも着目できるように、学習時間と就寝時刻の記入欄を設けました。さらに、学校保健委員会でもメディアを取り上



げ、平成30年度と令和元年度には全校生徒や保護者も参加し、メディアとの関わり方について広く知らせる機会をもつことができました。

このように小中連携して取り組んだことで、9年間を通して一貫した指導につながり、また、年々、取組が充実したものとなっています。今後も小中連携しながらアウトメディアの取組を継続し、主体的にメディアをコントロールできる生徒の育成に努めたいです。

福島 侑加（高・中田中）